



田植えの時期が到来しています。本市でもあちこちで田植えの風景が見られます。そんな風景を見ながら時々目にするのは、道端に佇む田の神。豊作をもたらす田の神の信仰は全国にありますが、実は具体的な姿は不明なことが多いようで、石像として見られるのは、九州地方南部の薩摩、大隅、日向の一部に限られるそうです。なぜ、鹿児島や宮崎だけに田の神はいるの？人々の暮らしにどう関わって来たの？



## 田の神像



「タノカンサア」「タノカンドン」と呼ばれ親しまれている田の神は、稲を守り、豊穣をもたらす神です。鹿児島県と宮崎県の一部で田の神像が造られるようになったのは、江戸時代の頃からのことだそうです。薩摩藩内での水田の開拓作業が始められたことや、この頃に仏像や神像を石造することが流行したこと、また僧侶や山伏による指導があったことなどが、この時期から造られるようになった理由だと考えられています。

田の神像の形体や像型については、研究者によりその分類方法や型の名称に違いが見られます。所崎平氏「南九州の田の神石像」(ひむか歴史ロマン街道形成推進事業調査報告書『田の神さあ』所収)によると、それらの分類を大まかに対比し分けると神官型(神像型)と地藏型(仏像型)、農民型(田の神舞型)、女子像型(女人型)とに分かれるそうです。

その他にも、独特な一石双体像や自然石の田の神が多く見られます。

## 田の神講



田の神講は「タノカンコ」と呼ばれ、春は耕作の始まる前の旧暦2月に豊作を祈願して、また秋の収穫後の旧暦10・11月には感謝を表すため、近隣の農家が集い講組を作り、餅をつけてフラット(※)に入れたものを田の神に供える行事です。地域によっては、田の神像に化粧をする所もあるそう。回数は秋のみに行うか、春と秋に2回行うかなど地域によってさまざま。

春と秋の2回行う理由の一つに、南九州では山の神が田の神になるという信仰伝承が関連していると考えられています。旧暦2月の丑の日、山の神は山から田に下りてきて田の神となり、旧暦10月の亥の日もしくは旧暦11月の丑の日に田の神は山に上がり、再び山の神になると伝えられているため、その日に講が行われるのではないかと。

座元の家には人々が集い、酒を飲んで食事をする楽しみも講には含まれていたようです。

※フラット＝わらで作った包みのこと

## 田の神オットイ



田の神の風習として、「田の神オットイ」というものもあります。「オットイ」という言葉は「盗む」ことを指していますが、実際は借りてくるというようなものです。これは豊作の続く地域や田の神を持つ地域から田の神を盗んできて自分たちの地域に田の神を据えて祭り、豊作に導いてもらうというものです。盗まれることを田の神は好み、盗んできた集落は豊作に恵まれると伝えられています。

一般的に田の神を盗むときは、村人が田の神に代わり書き置きを残して村を出て行きます。数年後、田の神は元あった地域に返すことがほとんどですが、中にはそのままのものも多かったようで、人に見つからないように山中に隠したり、盗まれないように大きな像を造るなどしました。市内各地においても、それらが関係しているのか、田の神像の刻銘から他の地域のものと考えられるものや磨崖に田の神を陰刻したものなどが見受けられるそう。

本市の祁答院町蘭牟田地区では、一部で「これが本来の姿ではないか」と考えられている田の神戻しという行事が伝承されています。

また、「伊佐の田之神さあ」(伊佐市郷土史誌編さん委員会編集)によると、17世紀から18世紀にかけて、薩摩藩内にサツマイモが渡来普及しました。

そのため生活に余裕が生じ、豊作祈願だけでなく、宗教的な信仰を求め、五穀豊穣および家内安全・子孫繁栄を祈願するものとして、身近なところで田の神の建立に繋がっていったのではないかと考えもあるそう。さまざまなが制限されていた時代、農民たちが田の神を集落ごとに祭って豊作と子孫繁栄を祈願し、焼酎を飲み、歌って踊って楽しく過ごすことには、藩の役人たちも豊作を祈願していることなので厳しく取り締まることができず、この出来事がのちに田の神講という行事へと発展していったのではないかと考えられています。



## 田の神戻し



田の神は田の水口など屋外に置かれるものと、屋内に置かれるものがあり、屋内に置かれるものは、「回り田の神」と言っており、田の神講の座元の家を一年交替で回っていくのが通常で、この蘭牟田地区の「田の神戻し」はその宿替えの行事になります。例年では4月10日に行われ、地元では、田の神は子孫繁栄、無病息災、五穀豊穣の神として信仰されてきました。

